

小学校の地域連携マネジメントにおける

教師の新たな学びに関する研究

—学校支援ボランティアに着目して—

関西外国語大学 チャクル ムラット

1. 問題の所在及び本研究の目的

近年、次々と打ち出されている日本の教育政策の特徴の一つは、学校と保護者・地域との連携・協働の促進である。地域学校協働本部・活動や生活科・総合的な学習の時間等における新たな外部人材活用の導入等はその例である。そこでは、学校の教師と保護者・地域住民の連携による教育活動づくりが意図されている。これは、教師が子どもに教えるという従来の学校における組織的・計画的かつフォーマルな関係性に風穴を開け、学校内にこれまでとは質的に異なる新たな関係性を生み出すものと捉えることができる。このような関係性の変化は、教師の力量や学びに大きく三つの影響を与えていると考えられる。

一つ目は、教職員以外に子どもの教育に関与するおとなの多様化¹をもたらすことである。今日、学校で働くのは、校長、教頭、副校長、教諭、養護教諭から、スクールカウンセラー、ソーシャルワーカー等へと拡張され、さらに日常的に数多くの保護者・地域住民による学校支援ボランティア（以下ボランティア）が学校の教育活動に関わっている。こういった様々なおとなの参入は、必然的に教師の授業づくりに影響を与えることになり、教師だけで授業を行う場合とは異なる力量が教師に必要となっている。同時に授業づくりを行う過程で教師にとってインフォーマルな（つまり正規の教師ではないおとなたちとの協働による）学びが生まれていると考えられる。このような過程で生じている教師の学びは、既存の教員研修ではなされ得なかつただろう。

二つ目は、「学び」に対する教師の捉え方の変化である。教師の専門性の向上やその要因に関する多くの先行研究に基づくなら、教師にとって重要な学びの大半は、同僚及び先輩教員との間での実践研究や相互作用が中心的位置を占めている。それは、教師集団という同質性をもつ関係性の中での学び

であろう。しかし、今日、学校現場においては、教師以外の多様な職員やボランティア等の教育の非専門家との関係性、つまり従来とは異質な関係性の中での学びが多くなっていると考えられる。安藤は、「さまざまな形での『先生』が子どもに関わることは当たり前になってきている」という「学校の現実に基づけば、免許状を有する正規雇用の教諭のみを対象として教師の専門性を問うていても意味がない」²と述べている。教師の専門性の向上において、教師集団内での学びに留まらず、他のおとなとの関係性の中での学びに関心を向ける必要がある。

三つ目は、教師の実践を支える知識の変化である。例えば、「実践的知識は、教師によっては無意識的かつ周辺のなものとして捉えられてしまう危険性がある」³とされている。教師の学びにおけるリフレクションに関する多くの先行研究では、それを解決する上で、反省を喚起する他者との協力が必要不可欠である⁴と指摘されている。教師は、先輩教師や同僚教師との関係性や職場文化を優先する中で、実際には他の多様なおとなとの関わりを通じて経験した学びがあっても、それが教師の学びの射程⁵の外に置かれてしまう可能性があるのではないか。また、学校評議員やPTA等に関する研究を見ても保護者・地域住民による学習支援的な協働における教育活動の中での教師の学びについての直接的な知見は管見の限り見当たらない。日常的な勤務中に学校の多くの教育活動に関与している保護者や地域住民のボランティアとの関係性や連携の中で、これまで意識されてこなかった教師の新たな学びに着目する必要があるのではないか。このような学びを実現するために様々な地域連携をマネジメントする必要があるだろう。そしてその地域連携マネジメントの一つとして、ボランティアによる授業づくりへの協力・支援を充実させることがあり、本論文はその事例研究を行うものである。マネジメント的要因とは、ボランティアの協力・支援を得て行う授業づくりにおける教育方針への位置づけ、役割分担、PTAの位置づけ、関係者間での情報共有と参加意識の醸成のことである。

以上の問題意識を踏まえ、本研究では、ボランティアからの協力・支援を得て行う授業づくりを通じて、教師はどのような新たな学びをしているのか、事例分析を通じて明らかにすることを目的とする。なお、ここでいう教師の学びとは、単なる教師自身の個業的な学びだけではなく、教育実践に協力している様々なボランティアとの主体的な対話の中で形式に拘らず日常的に生じる学びを想定している。ボランティアとは、様々な知識や経験を持つ保護者・地域住民が、日常的な学校の教育活動において多様な学習活動や機会

を支援する活動やそのアクターを意味している。

2. 本研究の課題及び方法

(1) 先行研究の検討と課題設定及び方法

教師の従来の学びにはどんな特徴があるのかに関する先行研究をレビューして、その特徴と比較してこの事例にみられる教師の学びについてどのような新しさがあるのかを考察する。これまでの校内研修に関する先行研究をみると主に、吉崎(1998)、浅田(1998)、木原(2004)が行った教師の成長・発達の解明や発達課題や成長モデルに関する研究、秋田(2008)や坂本(2010)による教師の学習の解明に関する研究、千々布(2010)、姫野(2011)が行った校内授業研究の現状や課題、教師の認識に関する研究が挙げられる。これらの研究の中で教師が何を学んでいるかについては、共通のものとして、「日常の授業実践に関する発見や学び」、「同僚との人間関係づくり」、「仕事や業務に対する意欲や動機の向上」、「指導内容や教育課程の理解」、「学校全体と子どもの状況の把握」、「普段の授業とは違う学習活動や指導法」等が挙げられている。しかし、これらは教職員同士で行う学びであり、学校と保護者・地域との連携・協働が推進される中で、教育の非専門家であるおとなの協力・支援を得て行う授業の場合に教師は何を学ぶかについても検討する必要があるといえよう。

そこで本研究では、上記の目的を明らかにするために次のような課題を設定した。まず、ボランティアからの協力・支援を得て行う授業の位置づけ・意義について明らかにする。つぎに、そこで教師がどのような学びを得ているかについて具体的に明らかにする。さらに、教師の学びを促進するマネジメント的要因について明らかにする。最後に、事例の分析結果に基づいて教師の新たな学びについて検討・考察を行う。

筆者は教師とボランティアの対話の中での学びのプロセスを分析するため、小学校においてインタビュー調査を実施した。なお、インタビュー調査の対象は、a小学校に勤務する管理職を含む教師4名及びボランティアとして参加する保護者・地域住民5名である。1回あたり20分～30分程度、半構造化インタビュー調査を実施した。インタビューデータの逐語録、当該学校から収集した資料、インタビューの時に取ったメモをもとに、分析を行った。主な質問は、①現在の本校の教育における学校支援ボランティアの位置づけ・意義、役割等、②ボランティアの協力による授業の取り組みにおける成果(活動の成果、教師、ボランティアの関係性、評価等)、③ボランティアの協力による授業の今後の展望(今後の方向性、課題等について)の3つ

チャクルムラット：小学校の地域連携マネジメントにおける教師の新たな学びに関する研究

である。インタビュー調査の実施日程および対象の概要は表 1 の通りである。

表 1. インタビュー調査の日程及び対象

	対象	日付
教職員	A 校長 B 教務主任 C 教諭 D 教諭	2013 年 12 月 18 日 同年 3 月 6 日 同年 12 月 13 日 同年 12 月 13 日
PTA・ボランティア	PTA 役員 (E 氏：保護者) ボランティア (F 氏：保護者) ボランティア (G 氏：地域住民) ボランティア (H 氏：地域住民) ボランティア (I 氏：大学生)	同年 4 月 6 日 同年 5 月 1 日 同年 5 月 1 日 同年 5 月 1 日 同年 5 月 7 日

(2) a 小学校の概要

a 小学校が位置している X 県の教育方針においては、「地域と一体となって子どもを育む」「地域の人的・物的資源の開発と活用」とされ、ボランティアを導入することが明確に位置付けられている。一方で、y 市では具体的な施策として「教育的資源となる研究所、歴史・文化・遺産、人的資源に目を向けて、地域教育資源を生かした y 市独自のカリキュラム」の中で、ボランティア導入の位置づけがなされている。どの教育活動にどのようなボランティアを導入するか具体的な範囲が示されており、教師は自分の教育活動のどの部分にボランティアを活用できるのかを把握している。

また、a 小学校における学校支援ボランティア活動の内容と特徴については次の通りである。a 小学校は、通常学級数 25 学級、生徒数 667 名、教職員 47 名であり、調査を実施した 2013 年現在、創立 40 年目である。ボランティア人数は 1 年に 200 人、のべ 2000 時間で、市内の同規模の学校の中では最も多かった。校務分掌上、ボランティアの担当者は教務主任となっている。a 小学校は、X 県 y 市の中心部にあり、通学区内の住民の中には、研究者、大学教授や大学生、スポーツ選手等、高度の知識・技術等様々な能力を有する者が多く、学校教育に対する関心は非常に高い。このような地域的特色を有する a 小学校では、保護者・地域住民や研究所等を対象とした学校独自の人材バンクを作成している。また、市役所等の「出前講座」を活用して環境課とリサイクル推進課等のボランティアを依頼することもある。さらに PTA 本部が持つ独自の人材バンクも用意されている。

(3) a 小学校におけるボランティア導入の目的・位置づけ及び意義

表2は、ボランティアを導入した教育活動の全体である。特に網掛けの教育活動においてボランティアの協力・支援を得て行う授業づくりが行われている。全学年を対象にして、系統的なボランティア活用が心掛けられている。

表2. 主なボランティア活用の種類及び領域⁶

領域	活動の種類
各教科	国語：読み聞かせ、生活科：諸外国のお正月、校外学習、野菜の育て方、蓬団子作り、算数：算盤、家庭科：ミシン、裁縫、社会科：各県の暮らし、自動車工場について、放送局の仕事について
総合的な学習の時間	キャリアと道德教育の一環：自分の夢、伝統文化の体験、戦争体験の話、各国の話、防災グッズ・バッグ・マップ作り
外国語活動	国際理解教育関係としての英語活動、外国語の読み聞かせ
特別活動	自然博物館：親子で星を観る会（道德の一環）
出前講座	液晶・静電気センサー作り、リサイクル学習、大学生・周辺住民：児童席テント設営、大学生による水泳指導
PTA 主催	夏セミナー「親子で学ぼう」（仮名）：①国際コミュニケーション、②DNAの話、③放射能の実験、④宇宙での無重力の実験、⑤生花、⑥茶道、⑦剣道、⑧墨絵、⑨着付け、⑩親父会の協力による除草作業、危険物除去、図書の整理、ベルマーク集計
研究所企業	理科：水素に関する講義、缶詰に関する講義

a 小学校におけるボランティアの協力・支援を得て行う授業の目的は、次の通りである。A 校長にとっては、それは、「子ども達により良い教育…より良い授業をしていきたい」という目的である。よりよい教育とは、「さらに質が高まる…もっと深い話」のことを意味しており、「そのために教師プラス外部の方々」の協力により、その目的を実現しようとしている。またB 教務主任は、「より豊かな教育活動を行っていきたい」という目的のため、「*沢山の経験や知識を持った方*」との協力により、その実現を意図している。C 教諭にとっては、防災士や各国の話をするボランティア活動を取り入れることが「*私たちの経験していないことを…子ども達に話して頂く*」ということから、教師の経験だけで教えられない授業の実現を意図している。

しかし、一体教師にない知識と経験とは何か、その具体的な中身について吟味する必要があると思われる。D 教諭にとって各国の話をするボランティ

ア活動には、「**実感の伴った（学び）**」という狙いがある。それだけではなく「**一緒にお互いに高め合えればいいな**」といった教師・ボランティア・児童の学びの展開を考えている。このように4名が考える、ボランティアの協力・支援を得て行う授業の目的が共通している点は、「子どもの学びの質的向上」であり、そのような授業を実現するための学びが教師に求められている。以下、ボランティアの協力・支援を得て行う授業において教師が得ている学びについて検討したい。

3. 事例分析

(1) 教師にとってのボランティア活動導入の意義

そこで、ボランティアの協力・支援を得て行う授業における教師の学びの位置づけについては次のようである。まずA校長は、「**より専門的な方（と）…担任（が）一緒に授業をすることによって教師だけではできない質の高い深い授業が成立する**」という位置づけをしている。なぜならA校長にとって教師は「**全てにわたって専門家ではない**」という意識があるからである。学習指導要領と教科用図書に基づいた指導にはない学問的・専門的な深い知識や経験の教授が可能になると認識されている。ここでは、総合的な学習の時間や生活科等の実施から今日までの教育実践のプロセスを経て、教師は自分たちの専門外領域が学校教育にあること⁷を認識していると思われる。

次に、B教務主任は、「**教員だけが子ども達に教えるという時代はもう古い時代です**」という認識を持っている。なぜなら、「**教師としての専門性を持っているのですがそれは最高とは思っていません**」と考えるから、教師の専門性を高めるには「**もっと素晴らしい力を持っている方が沢山いる**」からそれらの人々の協力を得て授業づくりをするという意義づけをしている。ここに従来の教師の知識と経験だけで授業を行うことへの教師の自己認識の変化が見られ、教職とは異質なものを持っているおとなからの学びも必要であるという意識がある。

またC教諭は、「**私の知識と本からの知識しか子ども達にはないので**」という理由から、自分自身の知識の限界性を乗り越える授業のためのボランティアの協同・支援であり、そのための活動であるという意義付けをしている。D教諭は、自身の授業において「**ボランティアさん、私、子どもの三角によって、今まで以上に学習の意欲が…高まる**」という意義を感じている。これまで教師は、子どもの学びの補助として、他のおとなの授業への関わりを考えてきた⁸と思われる。しかしここでは、ボランティア自身の学びを含めて

意義付けるように意識が変化したと理解できる。子どもを中心とした教師、ボランティア等の集団を超えた学びを意図している。本校にとってのボランティアの重要性について「**ボランティアの活用は絶対必要ですね。ボランティアなしでは、本校のこれからの学校教育は成り立たないと思います**」(B教務主任)という、ボランティアとの教育活動がないと学校教育が成り立たない、唯一無二の大きな存在意義を持っていると捉えている教師もいる。このように、4人それぞれの語りが共通する点は、教科書等の枠を超え、教師の知識と経験^①だけでは実現できない質の高い授業を実現するため、ボランティアの協力・支援の意義が大きいということである。

(2) ボランティアの協力・支援を得て行う授業での教師の学び

①自分自身にない知識、考え方、経験・技能に関する学び

教師は総合的にボランティアの協力・支援を得て行う授業において「**教師が知らないこと…知識や経験が豊富なプロの方**」から「**教員もとても勉強になる**」(B教務主任)を前提にしている。つまり教師が知らない知識や備えていない経験を持っているおとなに着目して、高い知性の活動の中で学んでいることを意識しているようだ。また、C教諭は、防災士のボランティアの「**プロから見た目線だとか…こういうやり方もあるのねとか**」に着目して、自分自身が「**私自身も新たな発見がありますね**」という。プロの考え方や、仕事をする上での方法に対し、新たな学びをしていることを意識している。さらに、D教諭は各国の話をするボランティアから「**単純に自分が日本の国を紹介する時にどうしたらいいだろうと逆の立場で考えました**」という。専門家のやり方、教師としての「逆の立場」で考え、教科書の知識だけを表面的に教えるという自分の授業を見直している。つまり、授業づくりの過程で、様々な専門職業人や特定の専門家が抱えているボランティアの面白さや情熱、専門的で深い知識・経験、見方や価値観等に対して、教師自身も理解に努めている。教師がそのようなボランティアと子どもとの学習活動の様子を観察しながら、その分野の深い知識を獲得したり、時と場合によってはボランティアの経験から学んだりしている。

最後に、ボランティアのF氏は水泳の指導について「**サポートというよりも(ボランティアが)主催**」という意識を持っている。教師も水泳専門ではないので、「**子どもが泳げるようにするためにはどうしたらいいですかね**」と聞かれて、「**じゃこうしましょう**」と授業内容を教師に提案している。つまりボランティアから教師に対して新たな授業内容を提案するというパタ

ーンもある。特定の教員が教えられない学習の分野があり、ボランティアを導入せざるを得ない学習活動がある。その際に、教師はサポーターという役割をとり、ボランティアと相談しながら指導の推進をしていることが分かる。

②教育の非専門家との授業づくりによる教師の学び

ボランティアの協力・支援を得て行う授業は、マニュアルや指導書のないものである。そこでの学びの内容は教師とボランティアとの相互作用や意識によって変化する。a 小学校でのこのような授業において、教師は教育の素人であるボランティアと行う授業づくりについて学んでいる。つまり、教師がボランティアから専門的知識だけではなく、方法、考え方、学び方、論理的思考、説得能力等の情意面での学びがあるといえよう。まず A 校長によれば、ボランティアとの授業づくりの中で、教師は「**普通の授業と違って**くる」中で「**授業を改善する**」ことが求められている。「**マイナス**」にではなくプラスの捉え方や思いが、教師と教育の素人のおとなとの授業づくりにおける学びの動機づけとなっている。

ボランティアは学校の職員ではない。それに対して教師は一定の緊張感を持ちながら関わっている。C 教諭は、「**ボランティアに沢山喋って頂く**」ようにして、「**あまり私が出ない**」で、「**子ども達もボランティアさんに質問してもらって時間を取る**」という意識と行動のもとで、立ち位置や役割を確認し、常に活動状況を調整し、ボランティアの積極的な講義を促そうとしている。また、C 教諭は、講義の進め方について、「**発表の仕方はこういう風にしたらどうですか**」とか、「**こちらでこういう話をして下さいと言っても、でも子ども達はこういう話は分からないと思うので、こういう話し方でいいですか**」とか、「**ここまでいいです**」というように、ボランティアと相談しながらその内容と進行についてやり取りすることでお互いの共通意識を確認している。お互いに活動について共通認識を形成する時に、活動前後の打ち合わせが重要である。

最後に、D 教諭は、ボランティアとの授業の中で、「**自分はセカンドティーチャー**」で、「**気になる時は前に出たりする**」が、「**呼ぶ立場としては自由にやって頂いて**」いき、「**言葉に詰まることがあったらお互いに確認したり、スムーズにいくように**」心掛けて、「**授業に結び付けられるよう**」に進め方を考えている。このような意識と行動の下で活動のための場の設定、活動の教育的な効果の向上、自分自身とボランティアの立ち位置と役割を明確化している。特に授業の目的を意識しながら、ボランティアの積極性を妨げないことを強く意識して、活動の中で随時その調整を試行錯誤している。

(3) ボランティアの協力・支援を得て行う授業の振り返り

①子どもたちの変化に対する教師の手ごたえ

教師は、ボランティアの協力・支援を得て行う授業と通常の授業とを比較し、子どもの反応の違いや変化を認識している。ボランティアとの学習活動の場合、D教諭自身は、「子ども達は記憶力」の良さに気づき、「1か月位後に振り返るとすらすらと状況を思い出す」というように、時間が経っても記憶に残っている学びがあるという子どものことを再発見、再認識している。つまり、教師ではないおとなが深い専門的知識や経験に基づいて話す内容は、学校の日常的な授業で見られなかった児童の学びや成長を引き起こし、教師だけでは気づかなかった児童の可能性を教師自身が知る契機をもたらす。またB教務主任はマンネリ化してしまった授業の雰囲気が「ボランティアの方に来て頂いた授業」によって子ども達の表情が「本当に明るくて…ああなんか子ども達が喜んでいる」というような形で変わると語る。子どもの学習意欲へと影響していることを学んでいる教師もいるといえよう。さらにC教諭は、「普段の授業にない子ども達の質問」に気づき、「この子達こんなことを考えていたんだ」とか、「別の人から教えて貰うということで、子どもの頭も柔らかくなって別の発想が出たり」とすると語るように、子どもの普段の授業に見られない学習面での姿に気づき、振り返りの機会を得ることもある。ボランティア活動を通して教師と子どもの関係を教師の無意識⁹の状況から意識へと呼び起こすリフレクションにより新たな学びを発動させている。

②ボランティアの協力・支援を得て行う授業の効果に対する教師の評価

教師がボランティアの協力・支援を得て行った授業の後に、C教諭は「ボランティアさんがこんな話をしていたよね」とか、「先生もこう思っていたんだけど、ボランティアさんのお話を聞いたらこうだったね」とか、「先生も初めて知ったんだよね」と児童に語りかけ、自分自身が学んだことについて子どもと共有している。ボランティア活動後の授業の中で子どもと活動の振り返りをしながら子どもの学習意欲の向上を図る授業の展開に取り組んでいる。また、このような授業の後に子どもの学習意欲は「随分上がると思いません」と評価をしており、積極的にそうした授業に取り組む姿勢を示している。これはボランティアの導入により、教師が自分の学びを意識する状態へと切り替わることでより良い授業実践を促し、教師の学びを促進することにつながっている。D教諭は、活動を振り返り、「子ども達は確実に学ぶことは多かった」とか「感想文の中で子ども達も自分が得たものが増えて…」という評価をしている。このように教師は子どもの具体的な学びを導き出し

ており、ボランティア導入による子どもの学びを意識すると考えられる。

③保護者・地域住民との良好な関係づくり

ボランティアの協力・支援を得て行う授業において教師とボランティアの良好な関係作りが必須となる。B教務主任は、ボランティアが「**ほぼ保護者の方…常に知っている方ですからね**」と、教師は保護者・地域住民との関係性を語っており、「常に知っている」状態が構築されていることが分かる。またA校長は、a小学校の教師と保護者が「**とても良い関係になっている**」と認識しており、保護者は「**一声掛けると皆さん気持ちよく来て頂ける**」ことや「**快く引き受けて、専門的な話をして頂く**」(C教諭)等、学校の教育活動に対して協力を惜しまない様子が見られる。教師と保護者の間で、「**やはり導入したいと思ってもそういう環境がなければ難しいですからね**」という協力的な関係性の基盤があるからこそ、学校としてボランティアを学習活動に積極的に導入することが可能だといえよう。またB教務主任は学校の一方的な意識ではなく、「**保護者に手伝って貰うのは当然だし、保護者の方もそれを望んでいる**」と、保護者が学校に対して支援したい意識を抱いていることを読み取っており、学びの当事者として関係づくりに積極的に取り組んでいる。

また、ボランティアとしての保護者等の側も「**(先生と)顔も合わせているので、会話も弾んで**」(G氏)や「**(学校の)仕切りがあまりないですね**」(H氏)や「**顔を合わせるとそういうものが段々なくなってくるんですね**」(I氏)等、学校の保護者等との良好な関係づくりを理解している。ボランティア自身が協力的な態度を示し、教師とボランティアとの対話と相互の認識・理解度が高いことが理解できる。B教務主任は、保護者等のボランティアが「**多くのボランティアの方が言うことはまた来たい**」と、「**教えることは楽しい**」や「**子ども達に役に立っているなという実感をされている**」という気持ちを抱いていることや教育活動におけるボランティアの自己実現・自己有効感の認識を把握している。学校はそのボランティアの学習における意識を読み取ることで、学校だけの要求に留まらないように活動の導入を図っている。このように学校側もボランティア側も良好な関係づくりができていると意識し、お互いの学びをサポートし、共有し合おうとしている。

(4) 教師の学びを促す地域連携マネジメントの要因

①学びの意識形成、積極性の醸成の促進

a 小学校では、授業づくりにボランティアの支援・協力を導入することで

全ての教師が学習をしていると認識されている。それは、A校長による「**教師自身もそこで大きな学びがある**」と、「**本校の職員は非常に前向きで積極的だと思います**」という教師の自由探索を促す意思形成があり、ボランティアとの学びに対する教師自身の意欲と積極性が醸成されているといえよう。

②学校相談・サポート体制による教師の振り返りの促進

ボランティア活動を促進する学校の組織体制として、校長、教頭、教務主任、学年主任等からなる連携体制がある。全てのボランティア活動は、学校の教育目標と教育課程に基づいて行われている。校長が示しているビジョンの中にボランティア活用の狙いに当たる内容が取り込まれている。それが教頭、教務主任、学年主任の間で共有され、校務分掌上ボランティアの担当者が教務主任であると明確化されており、一般教諭の間にも意識されている。ボランティア担当者は学年主任を介して教師のボランティア要望を取りまとめたり、ボランティアの情報を提供したりする。また、教師が必要としているボランティアの支援を積極的に進めるように、随時気軽に相談に応じたり、活動のフォローや成果のフィードバックをするといった相談体制も設けられている。教師への意思表示や柔軟で積極的な対応によって教師に対し、ボランティア導入が促されている。これは、「ボランティア対応を組織化した相談・サポート体制」であり、さらに「ボランティア登録制度」も整備している等、教師の振り返りによる学びを促進する要因となっている。

さらに、学校とPTA組織の連携により、PTA本部のメンバーを中心に年度当初に保護者や地域住民のボランティアを募ったり情報収集したりしている。また年度中に教師へのボランティア活動の提案や情報提供をしたりする等、教師とボランティアを繋ぐもう一つのコーディネーションの媒体としてPTAの機能が整備されている。これは学校と保護者・地域住民の連携を促し、学校の地域連携をマネジメントする上で重要な役割を担っている。

③ボランティアの協力・支援を得て行う授業に対する関係者の評価

a 小学校は、ボランティア活動に対するボランティアや外部者からの評価が高い。ボランティア自身が学校で行った活動に対する評価に関してB教務主任は「**殆どの方が…やあ来てよかった**」とか、「**勉強になった**」とか、「**とてもいい感想を頂きます**」という評価を得ており、ボランティアの自己実現と共に新たな学びにより喜びを感じている。それが教師にとっては「**ですのでまたお願いしようという勇気を貰います**」というように、教師とボランティアにとって、ボランティア活動を積極的に行うことへの動機づけや振り返りとなる。それによって教師がボランティアの協力・支援を得て行うこと

を肯定的に捉え、更なる学びに取り組む要因となっている。

A 校長によると、放送大学の研究者がボランティアの協力による授業を参観した際、「*お褒めの言葉を頂きました*」という。学校の関係者ではなく第三者から見ても、本校での学びが高評価に値する証左である。これは、ボランティアの協力・支援を得て行う授業やそこにおける教師の学びを推し進める要因にもなる。このような高い評価をしているのは、「*学校の先生も参加して凄く勉強になった、よかった*」という教師、「*講師の方が想像していた以上の講座内容にしてくれた*」という E 氏等、実際にボランティア活動を推進している保護者の組織的な支援活動としての PTA と教師である。PTA として活動に関わることで、教師とおとなの学び合いをサポートして、満足意識を高め、そのことが今後の活動の継続を促進させる要因である。

④ PTA による学校支援体制とコーディネーション

a 小学校の PTA 学校支援体制は、本部役員が 7 名程度で、本校に子どもが通っている保護者で構成されている。ボランティア活動の企画や連絡調整、他のメンバーの説得や動員、学校との支援活動等についてのやり取りをするのは PTA 会長及び副会長であり、他の 5 名と共に活動の運営や実施に当たっている。PTA は「保護者と子どもの知的好奇心と楽しみを満たす」ということをコンセプトにして、PTA 本部役員の知り合いの中に働きかけている。そうして国際コミュニケーション、研究所等に勤めている仕事上の関係性を生かして「DNA の話」、「放射能の実験」、「宇宙実験：無重力」等について専門的に話すボランティア活動が調整・推進されている。きっかけは、学校の多忙化で夏休みにボランティアの協力を得て行う学習活動をいったん止めたことにあった。その代わりに、「*PTA の方で復活させてみましょう*」という声があがり、PTA 主催で行うことになった。そこには、PTA による学校支援のコーディネーションがある。まず、E 氏による「*PTA の本部役員の理解を得て*」、活動のための学校との連携推進体制を整えている。次にボランティア活動を実施する上で、学校と PTA で、活動範囲と責任範囲について確認をしている。PTA 本部での理解の促進、企画、連絡調整・運営を行いつつ、教職員とボランティアの理解を得て、意識共有を図ろうとしている。E 氏は、「*それに対する批判は無かったですよね*」と語り、何よりも関係者の評価が、PTA 自身の活動に対する意義づけとなっている。それに、PTA から保護者に対して日常的にボランティアに誘うメッセージも送られている。例えば、D 教諭は PTA の保護者から定期的に「*こんなのやってみませんか*」とか、「*評判が良かったのでぜひ企画して下さい*」というようなボランティア推進のサ

ポート体制を把握している。また、子どもの学びに対する保護者の貢献意欲が高く、子どもの学びを保障しようとする献身的な姿勢を見ることができよう。このようなPTAによる保護者と教師の活動への理解を促すコーディネーションは、教師の学びを促す要因であるといえよう。

⑤新たな教育資源の探索・発掘

a 小学校の周辺地域は、企業や研究所が数多くある特徴を持っている。民間企業や研究所は、学校教育への知的貢献の方針を持っている。A 校長は、「*α産業*」という水素の会社とか「*γ社*」という缶詰の会社等の企業や研究機関と連携を取って学校教育への貢献の意思と理解を図っている。そこで「*だったらお願いします*」という意思表示をして、6年生の理科の授業で水素と缶詰についてボランティアの協力を得て行う授業に取り組み、新たな学びの導入を試みる積極的な活用の姿勢を見せている。「*アンテナを高くしていれば、そういうのが沢山ある*」というように、新たな学びの機会のための情報収集や共有といった探索と発掘という地域連携マネジメントを行っている。E 氏も、「*研究所がやる夏休みの講座って競争率が激しいんですよ。それが自分の小学校でできる…お得だと思います*」と語っており、PTAとして外部機関からの新たな学習機会を意識している。このように校長とPTAが地域での学習機会を提供する機関と連携し、子ども、教師、ボランティアの新たな学びとして上記のような要因を整備してマネジメントしている。

4. 考察

以上をまとめると、学校にとってボランティアからの協力・支援を得て行う授業づくりは、教師の経験と知識を超えた、より豊かな教育を創出するために、学習内容を深化させ、実感を伴った質的向上をもたらす役割を担うと認識されている。そのように認識されるのは、校長が示した「より良い教育」づくりという目標の実現に向けて、教師が教科書の中の知識と経験を超えた質の高い授業を成立させ得るからであり、このためのボランティア活用は必須である。そのため、学校では管理職及び教務主任・学年主任を介して、教師間でのボランティア活用に対する積極性を高めるために気軽に相談できる雰囲気と体制づくりがなされている。これは、教師が積極的にボランティアと関わりながら、教師間でのコミュニケーションを促し、自分の授業を省察して見直すような学びの体制を作り上げている。そして、学校全体として教育の非専門家との教育実践を通じて教師の学びを促すような地域連携マネジメントが行われている。

教師は、ボランティアからの協力・支援を得て行う授業から自分の知らないことや教師の仕事とは違う知識と経験に触れる。そこで子どもの新たな可能性に気づき、専門家である教師と非専門家であるおとなが実践を振り返って見直し、自分にとって新たな知識、方法や発見を得ている。つまり、自分の学びを子どもと共有して、子どもに教師の学んでいる姿勢を見せたり、子どもの変化や自分の変化を実感したり、他者の専門性に触発されて得た新たな知識と経験を自分の知識と経験に転換して、さらにそれを、新たな子どもの学びへ向けて活用している。また、学校の教育活動の理解と支援を得るために教師同士の良好な関係を作るだけでなく、保護者・地域住民と連携し、良好な関係作りの方法を意識的に学んでいる。

このような学びのプロセスには校内研修におけるそれと共通する点が多いであろう。しかし、差もあると思われる。主に次の2つのことが挙げられる。

第1は、教育の非専門家と協同して仕事をする「学び合う専門家」となっていることである。教師は、勤務校が置かれている地域環境のもとに、教育活動の幅を広げて、教師の知識と経験だけではできない質の高い授業を教育の非専門家であるボランティアの協力・支援によって実現している。教師の意識は、「教える専門家」というより、子どもとともに学び、教育の非専門家であるおとなとともに学ぶ、「学び合う専門家」へと変化しているといえよう。ここでいう「学び合う専門家」とは、学びの場に参加する学習者の子どもと支援者であるボランティア、そして推進者としての教師自身が相互理解を深め、一人ひとりが主体的に学びながら、相互に高め合うことを促し、導くものである。

第2は、ボランティアの支援を受けて主体的な学びが得られる機会である。例えば(2)で述べたように、ボランティアからの協力・支援を得て行う授業は、「教員もとても勉強になる」とか「私自身も新たな発見がある」とか、「逆の立場で考える」といったように学校の理解と意識の転換・喚起による好奇心を満たす機会となっている。教師の多忙化や校内研修の形骸化等により研修への参加が減少していると言われている。しかし、年齢や経験、立場に拘らない自由で楽しく学ぶボランティア導入によって普段とは違った授業が可能になると、意図的な研修とは異なる学びが実現できる。教師の多くは、与えられた凡庸的な指導の知識、スキルの限界を意識するようになって、授業に疑問を感じている。そこに、おとなの同僚や先輩教師との関係性を含め、教育の非専門家であるおとなとの関係性があることに気づく。そこに、

子どもの学びの質を如何によいものにするかについて学ぶもう一つの機会がある。このように、a小学校は教育活動にボランティアを導入することによって、教師だけでなく、関係者全てのためのもう一つの学びの機会と場を築いている。このような学びの機会と場を築くためには、保護者・地域住民のボランティアとしての協力・支援が必要であり、そのための地域連携的なマネジメントが必要である。事例校でのボランティアからの協力・支援を得て行う授業を可能にする地域連携のマネジメントのあり方は次の2つに要約できる。

第1は、事例校において教師の積極的なボランティア導入と学びを促すための共通理解と合意形成を促す情報マネジメントが行われている。これは、教師の主体的な取り組みを促して、ボランティアとの学びに対して教師自身の理解と意識を喚起し、積極性の醸成を進めている。教師への意思表示や柔軟で積極的な対応によって教師に対し、ボランティア導入と学びが促されている。例えば、ボランティアの協力・支援を得て行う授業の成果のフィードバックや教師の状況の的確な把握によるフォロー、気軽に相談に応じること、振り返り等が挙げられる。校長とPTAが地域の学習機会を提供する機関と連携し、子ども、教師、ボランティアの新たな学びとして上記のような要因を整備してマネジメントしている。ボランティアの自己実現と共に新たな学びにより喜びを実感することと、教師のボランティアの協力・支援を得て行う授業に対する手応えは、「またお願いしようという勇気を貰います」というボランティア活動を積極的に行うことへの動機づけや振り返りとなる。このような活動の成果や、授業の支援に参加したボランティアによる評価等を共有し、相互のコミュニケーションと理解を図ることは教師の振り返りとともにボランティアの意欲を促す要因となっている。

第2は、PTAのサポート体制によるコーディネーションと外部機関や第三者の連携による学びの質的向上の実現である。(4)の④で示したようにPTAは構成員がボランティアとして授業に協力・支援するきっかけを作り、企画、連絡調整、進行といったコーディネーションを行っている。そこで学校とPTAの責任の所在と役割の明確化、共通理解を図り、教師とPTA、ボランティアの意識共有をしている。このようなコーディネーションによって保護者と教師の学びを促す機能を果たしている。また、校長とPTA役員が企業や研究所、第三者の献身的な貢献意識を把握して連携をとり、学習活動の質的向上の実現に取り組んでいる。このように教師、保護者、地域住民のいずれもが、学びに対して積極的・献身的な姿勢を見せている。

一般的に、教師の学びは同僚及び先輩教員との同質的な関係による実践研究や相互作用が中心的位置を占めている。しかし、a小学校の事例から、それに加えて、教師が自分の専門性の向上のためにもこれまでに教員同士間で生成した実践知に、異質な経験と知識を挿入することにより、教師の知識・経験の転換、子どもの学びへの活用という教師の実践を支える知識の変化とリフレクションがあるといえよう。しかし、同じような制度的条件のもとにあっても、地域独自の条件が変わると、マネジメント手法も変わる。a小学校のような共通理解と情報マネジメントがうまくいく学校は多くない。学校の教師のもう一つの学びの機会と場という共通理解と位置づけも重要なビジョンであり、ボランティアに対する教師の理解や意識は上記のように変容していくであろう。

このように、ボランティア活動は、子どもの学びにおいて高く評価されているが、教師の学びの全体の中で、ボランティアからの学びがどの程度占めているのかは読み取りにくい。ボランティアの協力・支援を得て行う授業は普通の授業とは違うため、そのためのマニュアルというものはなく、ボランティアによっては学びの差が生じることが考えられる。したがって、今後の課題として、ボランティアの協力・支援を得て行う授業において、教師の学びがあるものの、それがどのように教師の成長につながるのか、そのためにどのような経営的働きかけがされているのかについて教師の学びの新たな展開の検証が必要である。

引用・参考文献

- ・秋田喜代美「授業検討会談話と教師の学習」秋田喜代美・キャサリン・ルイス編著『授業の研究 教師の学習』明石書店、2008年、114-131頁。
- ・浅田匡「教えることの体験」浅田匡・生田孝至・藤岡完治編著『成長する教師—教師学への誘い』金子書房、1998年、174-184頁。
- ・小島弘道・北神正行・水本徳明・平井貴美代・安藤知子『教師の条件—授業と学校をつくる力』学文社、2006年。
- ・木原俊行『授業研究と教師の成長』日本文教出版、2004年。
- ・坂本篤史「授業研究の事後協議会における教師の省察過程の検討—授業者と非授業者の省察過程の特徴に着目して—」『教師学研究』第8・9号、2010年、27-37頁。
- ・田中智志・橋本美保監修、浜田博文編著『教育の経営・制度』一藝社、2014年。

- ・千々布敏弥「校内研究等の実施状況に関する調査」国立教育政策研究所、2010年。<https://www.nier.go.jp/kenkyukikaku/pdf/kounaikenkyu.pdf> (最終閲覧日: 2023年10月20日)。
- ・姫野完治「校内授業研究及び事後検討会に対する現職教師の意識」『日本教育工学会論文誌』第35巻、2011年、17-20頁。
- ・吉崎静夫「一人立ちへの道筋」浅田匡・生田孝至・藤岡完治編著『成長する教師—教師学への誘い』金子書房、1998年、162-173頁。

注

- ¹ これについては、浜田博文らによる共同研究における実態調査の成果(研究代表者 浜田博文「小・中学校の課題多様化に対応した学校組織の協働のあり方に関する調査研究」平成20年度財団法人文教協会研究助成報告書、2009年3月)が挙げられる。
- ² 安藤知子「教師の葛藤と発達」小島弘道・北神正行・水本徳明・平井貴美代・安藤知子『教師の条件—授業と学校をつくる力』学文社、2006年、152-154頁。
- ³ 島田希「教師の学習と成長に関する研究動向と課題—教師の知識研究の観点から—」信州大学教育学部附属教育実践総合センター『教育実践研究』第10号、2009年、14頁。
- ⁴ 木原俊行「教師の反省的成長に関する研究の動向と課題—他者との『対話』システムに着目して—」『教育方法学研究』第21巻、1995年、108頁。
- ⁵ 白岩博明『『開かれた同僚性』を考える—『チームとしての学校』の理念によせて—』『広島工業大学紀要教育編』第16巻、2017年、24頁。
- ⁶ インタビュー調査・観察調査のメモ及びa小学校の資料により作成。
- ⁷ 例えば、「今日の学校においては、子どもたちの日々の生活経験としての学校教育は、各学校単位で担当教員のみが提供するものではなくなってきている」という指摘がある(安藤知子「学校における指導組織と学級経営」田中智志・橋本美保監修、浜田博文編著『教育の経営・制度』—藝社、2014年、164頁)。
- ⁸ 例えば、教師による教科・単元に基づいた囲い込みが生じていることやボランティアによって教員にもたらされる知識のインプットは「子どもに関する知識」を中心としていることや、教員はボランティアの影響力を限定的に解釈すること等が指摘されている(仲田康一「学習参加による父母—教員間インタラクションと教員の専門知の関係についての考察」『日本教師教育学会年報』第17巻、2008年、69頁)。
- ⁹ 自分はユングの言う個人的無意識に通じると考えているが、それについてはもし機会があれば稿を改めたい。